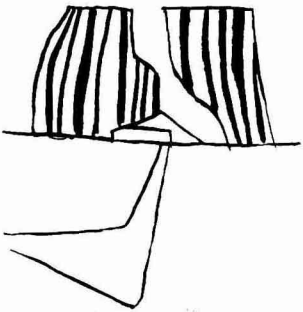
激しい夏

太田博子

朝日新聞社

激しい夏

太田博子



朝日新聞社

NETテレビ懸賞小説優秀作

クルドの花

五十嵐　邁

紛争たえまないイラクの国境ふかくに入りこみ、世界の珍奇種を求めて植物採取に熱情を傾ける日本人学者と、彼を慕う現地人アッシリアの女性との愛の物語を、荒涼たる山岳地帯を背景に描く異色長編。

六六〇円

風の柩

有葉　太郎

日本人ボクサーのケン・カラテとは何者か。テロリスト？　詐欺師？　インディアンの救済者？　石油タンク連続爆破事件の謎を追って、カナダ～アメリカ～日本を舞台に展開するハード・アクション小説。

六四〇円

大厄記

久保　綱

〝東北の竜〟といわれた河井継之助の落し胤の女性と、河井に反抗して越後長岡を脱藩した若い志士の遍歴を軸に、幕末の多彩な人間群像と時代の苦悩を描くため、作者が生命をすり減らして書いた遺作。

六八〇円

朝日新聞社

激しい夏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一章

昭和五年の春である。汽車が海辺の駅に止まり、駅員が間のびした声で、十分停車と告げて通った。四月の海は淡く烟って、対岸の嶺線を滲ませている。漁り舟が一艘、すぐ眼の下に動かずにいて、内海は、風を和ませて眠っているようだ。

「お父さん、大草だね。あとどのくらいかな」

十四、五歳の少年が、向かい合った父親に聞いた。

「長崎は、二時頃だろう。いまのうちに昼飯にしようか」

少年はうなずいて、網棚の籐の四角い籠を父親に渡した。細いが、上背があり、伸び上がらずにそれを降ろせた。仕立て直しらしい白絣の木綿の肩が、深くピンと張っていて、短い袴と、黒足袋の間が細く締まっている。

「水を汲んで来ようか」

「井戸があればいいが」

「なかったら、やめるさ」

少年は、竹筒を持って降りて行った。車内の客はまばらで、柔らかい日射しだが、父親がそれを避けるように通路側に腰をずらすと、通路を挟んで向かい合わせの老婆が、

「よか息子さんですね、いくつになんなさっですか」

と、ホームを駆け出して行く少年を見やって、聞いた。
「十四になります。県立中学に入りましたから、連れて行くところです」
「へえ。長崎のう？　そりゃまたよう出来なさって、楽しみにあんなさるばい」
「いや、まだ子供ですから」
父親はてれて、籠の中の重箱を、少年の横の席においた。
「おっか様のよっぽど喜んで弁当ば作んなはぁましたろ。県立中学は市内の学校でも十人、せいぜいそのぐらいしか入りませんもんね。どこからおいでなさぁました」
「大村の田舎です」
上品な感じの老婆は、感じ入ったようにうなずいている。
父親は海辺の窓の方を向いた。老婆は自分も隣の席に置いてある渋い布張りの袋から、弁当と水筒を出しながら、
「ありぁ、お茶は仰山にあったとば、差しあげればよかった」
と、独りごとを言った。
少年が、改札の横手から駆け足で戻って来るのが見え、やがて息を弾ませて通路の入口に姿を見せた。
「あったか」
「うん。瓶がこわれてたけど、ほら、ね」
かすかな水音をさせて父親に渡した。可愛いが、利かぬ気らしい締まった顔立ちである。粗末な弁当であった。トロロ昆布のついた握り飯を美味そうに頬張っている。
「圭介、お前と汽車に乗るのは初めてだな」
と、父親は、深く息子の顔を見まもった。
圭介は、寂しそうな目でうなずくと、父親ののみこんだ次の言葉の、「そして、これが最後かも知れ

ない」という悲しみが沁み入るように感じられて、握り飯の塩味をさらに濃くして飲み込んだ。
駅員が、同じ調子で「発車」と告げ、汽車は「ゴトン」と、車内をひと揺れさせて動き出した。向かいの老婆が、飲んでいたお茶にむせて咳き込んだ。
「大丈夫ですか」
父の正利が、労りをみせると、老婆は袖で口もとをおおい、年に似合わぬ艶を含んだ声で笑った。

圭介は、汽車で長崎に行くのは二度目である。二十日あまり前、小学校の校長に連れられて、県立長崎中学校の受験に行った。
その日は思わぬ雪で、両側に迫った山峡は疎林の下草が雪におおわれ、枝ばかりの木々の間が透いて見えた。ひどく頼りなく感じられて、「禿げ頭の毛のようだ」と、おかしくなった。ときどき、思い出したように西陽が窓を射るが、すぐに綿雪に消されてしまう。綿雪は、汽車の窓を斜めにふわっと舞って過ぎる。圭介は熱心に見つめていた。
「気を楽にな。緊張しすぎると、わかっとる問題もわからんようになる」
圭介の小学校では、県立長崎中学の受験生を出すのは創立以来のことなので、むしろ圭介より固い表情の校長の興奮が、それとわかるように、同じ言葉を大村を出るときから幾度も繰り返していた。
長崎の駅に着いたときは、街灯の明かりが薄闇に滲んでいて、雪解けの水が、軒下に小雨のような音をたてていた。校長は、人力車を一台よんで、
「橋口、お前は私の股の間に乗んなさい」
と、先に乗り込んだ。
「いいんです、一緒に走りますから」
全体に丸っこく背の低い校長と、上背は変わりないのに、抱かれた格好になるのは耐えられるもので

はない。
「冗談じゃなか、坊ちゃん。そんげんされたら、わしがたまらんばい。早よ、乗んなさいまっせ」
俥夫に促されて、圭介は仕方なく校長の縞のズボンの間に腰を据えた。尻がむずむずと生温かくて、背骨をぎこちなく突っ張らせた。
「窮屈にあんなさろけん、幌は降ろしませんばい」
と、俥夫は丸い笠を風に向けて走り出した。
「すまんが、県庁の坂の方に廻ってもらえんかな」
「西山ていいなさったでしょうが、遠廻りですばい」
「この子に見せたか所のあってな、その分ははずむけん、頼まれてくれんか」
「へい」
俥夫は、方向を変えて電車通りを走り出した。圭介は、電車を見るのは初めてであった。緑色の車体が横揺れしながら俥を追い越して、灯の滲んだ窓に、立っている人々が並んで見え、同じように揺れて遠くなった。
先に行った電車が停止しているところを俥は左に折れた。
「その坂の手前で、ひと息入れまっせんか」
と、校長が大声を出すと、俥はゆるやかに道脇に寄って止まり、俥夫は前梶を下ろした。
危なく滑り落ちそうになって、圭介は足を突っ張り、目を上げると、すぐ横に「文明堂」の看板が目に止まった。
「橋口、あすこば見てみなさい」
校長の太い指の行方を追って、圭介は、はっと息をのんだ。「浅倉外科病院」と、金文字の横書きが、三階建て洋館の入口に門灯に照らし出されて見上げられた。

「これが、今度、お前が合格したらお世話になる、叔父さんの病院だ」
圭介には、それは絵で見た外国の城のように思われた。建物の後ろは茂った木立になり、三階の屋根にとどく大きな木が一本目立って、建物の向こうは坂にそって少し奥まっているが、瓦の屋根の重なりがある。坂なので、母屋の位置が高くなっているのであろう。梶棒に腰を下ろして煙草をふかしていた俥夫は、驚いた声で聞いた。
「浅倉病院の御親類であんなさっですか」
「この子の父親の、実の弟さんのお宅でな、合格したら、浅倉病院の子供として引き取られるそうたい」
「へえ、大したうちの坊ちゃんですたいな、明日から試験ですげなばってん、長中ば受けなさいますとでしょう」
「うむ、よう出来るけん安心はしとるが、今夜はわしの娘の家でよう寝せるつもりたい」
圭介は、叔父にあたるこの病院の主を、小学校に入学する直前、やはり雪もよいの日に、母の葬儀に参列したのを見たことがある。それ以前の記憶にも、その後にも会ったことはない、知っている他人よりも遠い叔父であった。
俥夫は掌に煙草の火を転がし、振り落とすと、煙管をひと吹きして腰の煙草入れに戻した。
「そいじゃ、行きまっしょか」
と、合図すると、丸い笠を前よりもいっそう前に傾け、「よっ！」と、ひと声掛けて、県庁前のかなりの急勾配を駆け登った。
試験が終わっての帰り途、長崎駅を発車すると間もなく校長は、
「橋口は、叔父さんの正純さんが、浅倉様の婿養子になられたいきさつは知っとるか」
と、聞いた。

「いいえ、なにも知りません」
「そうか、別にお前が知って悪かことじゃなかろう。先生が話しておいてやろう」
圭介は、もちろん知りたいと思った。なんの予備知識もなしに、あの豪壮な家の住人になるのは心細い。
「しかし、その前に、ちょっと歴史の話ばしようかな」
と、前置きして、校長は、圭介を試すように聞いた。
「橋口は〝大村争動〟のことは知っとるかな」
「はい。勤皇の志士の石碑を見ました。でも詳しいことは知りません」
校長の話によると、その〝大村争動〟とよばれる事件が起こったのは、慶応三年正月三日の夜のことである。その夜、城内で恒例の御謡初めの宴があり、その下城の際に事は起こった。勤皇派の盟主である家老の児玉九左衛門が、従者を伴って自宅の門を入ろうとするとき、背後から賊が襲った。賊は、途中をずっと付けていたのだが、家老にも隙がなく、従者が邪魔で切りつけることが出来なかった。家老が門に入り、従者が一歩先に出た瞬間を切りつけたのである。しかし、門内の植え込みにさえぎられて深手にならず、家老は片耳から背後にかけて、斜めに一刃を浴びただけで、命に別状はなかった。また、この数刻後、あるいはほぼ同時刻、国学者松林飯山は、自宅手前の小路で、賊にやはり背後から斬りつけられ一刃で絶命した。同じとき、維新の志士、渡辺昇も賊に襲われた。渡辺昇は神道無念流の達人である。日本剣客伝の一人に挙げられるほどの武名を知られた人であるから、ついにその隙を窺うことが出来ず、賊は遁走した。
「渡辺昇は、江戸斎藤道場の塾長にもなるほどの達人だから、その頃の若い勤皇思想家たちと交わり、当時の世相をよく知っておられたし、飯山先生も当時の日本の秀才ばかりが集まっていた昌平黌という塾で、三秀才の一人といわれたおひとだ。この秀れた若者が、大村に帰って、藩論を一つにしようと奔

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

走された気持ちは、お前にも理解出来ようが」

校長の話は、叔父と浅倉家との縁までにはほど遠かったが、圭介は面白くなっていた。

「そこで、浅倉様だが……。藩では上席の御家老であられた。当時はまだ、幕府は健在であったから、急進派の若者たちに藩内の思想を統一されてしもうたら困ることになってしまう。浅倉様は、おそらく背骨のしっかり通ったお方であったと私は思う。時勢を穏便に見きわめて立つのが得策だと考えるのが、藩の中心になる御家老の深いお考えとしては、当然のことだと思わんかね」

圭介は「はい」と答えて、何か一つの物事が纏まるときにはかならず、相対峙する考えがぶつかり合うものだと理解出来た。

「ところが、若者たちは性急だから待ってはおられん、何か策を弄して浅倉様ば失脚させようと目論んだ。内容は私にもよくわからんが、藩公に建白書というものを差し出して、とうとう浅倉様は家老職を辞められて、お前たちの村の知行所に引っ込んでしまわれた」

圭介の村では、浅倉様のことを〝お館様〟と、呼び慣わしている。

「渡辺昇というお方は、どうも自分の考えを通すのに手段を選ばんところがおありのようだ。剣は強いし、手に負えんところがあったとじゃろう。浅倉様の徳を慕う者や、若者の勝手なふるまいをこころよく思わん者もおった。児玉様という御家老は、もともと、針尾島の豪族で姓を針尾というておられて、大村家譜代の家臣ではないし、浅倉様よりずっとお若い。それに藩内の若者にも、渡辺派ばかりがいたわけではない。特に上級武士の中にそれが多かったということたい」

慶応三年は、翌年の九月に、明治と年号が改まる年である。若者たちの思想の衝突による事件は、藩公の裁断により、外部に漏れぬうちに、佐幕派と称せられた者たちに悲劇の結果をもたらした。ある者は暗殺され、ある者は投獄されて獄死し、処刑された。かたちの上で佐幕派とみなされたのであって、悲しい結末を見た者たちも、当時の犠牲者にほかならない。こうして〝大村争動〟は終わりを告げたが、

真相を知る者は固く黙して語らず、現在も、勤皇志士と讃えられた者たちの石碑は残るが、真相は語り継がれてはいない。この石碑は、後に明治政府高官になった渡辺昇が建立したと伝えられている。

汽車は、大草という駅に止まった。下り列車を待ち合わせるので二十分停車という。

校長は話を切って、煙草に火をつけ、圭介は海側の窓を開けた。

「寒くありませんか」

「まだ少し冷たかが、発車するまで開けておこう」

校長も、自分の側の窓を開けた。三日前の雪が嘘のように澄みきった空の蒼さだった。対岸の半島の山なみが洗われて、蒼く鮮やかな曲線を描いている。湾内の海に午後の陽が、光の模様を幾筋も走らせ、その線を縫って白い帆の舟が、風で横に滑っていく。微風は、窓際の圭介の手も冷たく撫でた。

大村湾を、向かい側の半島と、こちら側の内陸とが袋のように囲い、伊の浦の瀬戸というところで、東シナ海に口を開いている。袋の口に当たる伊の浦の瀬戸は、半島の先端と、内陸から突き出た針尾島と迫り合っていた。海水は、名高い鳴戸の渦潮のように渦を巻いて、ちょうど三月の今頃がいちじるしくそれを見せる季節である。大海の潮は、内なる海の懐ろを激しく恋い、一刻の安息を得て大海に戻る。入る潮と出る潮の揉み合いを、圭介は話には聞いて、まだ見たことはなかった。大草の駅は、その内海の袋の底の位置に当たる。

圭介の村で〝お館様〟とよばれる浅倉維三郎は、校長が話した御家老の孫で、浅倉家の三男である。乞われて長崎の豪商、船具問屋の婿養子に入ったが、浅倉家で嫡男が病没し、二男は別家を立てたので、商売はそのままで浅倉家に戻り家督を継いだ。

港としての価値が横浜や神戸に移り、長崎の古いのれんのほとんどが破産や衰微を見るなかで、維三郎はよほど理財に聡く、運のいい人物であったらしい。財を地道に守り商人に納まっていたが、先代が没したあと、士族への願望が滾り立ち、一人娘の加奈を東京の大村家の別邸にあずけて女子学習院に通

わせ、士族の姿勢で育てることにした。そこで当然その婿養子を決めるにも、その考えを固執して物色していた。

その頃、知行地の村の医者、橋口友斎が、長崎医学校に入学した二男の正純を伴って挨拶に来た。維三郎は、その青年の端正な面立ちと、内に秘めたものに、「これは鍛え甲斐がある」と見、「正純」という名にも魅力を覚えた。代々大村藩主はその名に「純」の字を継承している。維三郎は、その正純を得ることに執念を燃やした。

校長の話が、浅倉家と叔父正純の縁に及んだ頃には、そろそろ大村が近くなっていた。圭介は頑固者の祖父が、よくお館様の申し出を承知したものだと思った。橋口家は貧しい村医者でも、浅倉家の小作ではないのだから、対等の位置にある。なにかお館様の無理を聞かねばならない事情があったのだろうか。

「祖父は、やすやすと承知したのですか」

「いや、お前のじいさんは頑固者だから、商人には息子はやれんと言われたそうたい」

圭介は、そのときの祖父の顔が見えるようでおかしくなった。

「ところが、お館様もいったん心に決めたことを曲げるおひとではなか。船具商の店ばお賭けなさった。もっとも、明治から大正に変わる頃は、不景気のどん底でな、大店の財産ば守るとに、医者に転換するとはちょうどよかったとかも知れん。外聞も、商人より医者の方がよかろう。お加奈様のためにもその方がよかと、あのお方のことのけん、そのくらいの見通しはつけておられたろう。それで正純さんが、医学校ば出られたらドイツに留学させて、東京の大学で学位ば取らせる。自分は店ばたたんで、跡は病院にして開業させたら、知行地に戻って隠居すると約束された。息子の将来ば思うたらこんげんよか話はまたとあるまいが。田舎医者にするよりか、その方がよかに決まっとる。さすがのお前のじいさんも折れて承知されたとたい」

「叔父もその約束を承知したのですか」
「親同士が火花ば散らしおって、息子も娘もまるで知らんじゃったというけん、大したもんたい。無理矢理承知させられたとじゃろ。しかし、お館様もちゃんと約束は実行されたとだから、文句は言えるまいが」
町のはずれで校長と別れた頃は、東の佐賀県との境を区切る多良の連峰は、暮れ残りの陽に映えて、まぶしく山肌をさらしていた。圭介はその山並みに向かって足を早めた。

祖父の頃は、まだ船具商に店を賭けさせるほど大見えを切られたのだろうが、いまの父の代は目に見えて火の車であった。橋口家の転がり落ちる坂道は、もはやどんづまりまで来ていて、その実情は、圭介にも身に沁みて感じ取れるようになっている。
橋口家は代々大村藩の医師の末席に座していたが、曾祖父の代に、浅倉家の知行地の村に開業し、耕す土地は、家族の糊口程度であったが、それなりの体面は保っておられた。それが衰退の兆しをみせはじめたのは、圭介の母おあきが胸を病んで臥ってからである。医者の家で〝肺病やみ〟を出したのは致命的だった。その頃、村道が拡がって、長崎から佐世保へ通う県営のバス通りになった。大村の町に簡単に出られるようになって、村人たちも次第に昔の律気さを忘れ、〝肺病やみ〟のいる村医者は見捨てられた。橋口医院の診察室に患者のこない日が、日々に多くなったのである。
圭介の記憶する母は、最初から病んでいた。納戸を明るく改修した病室は、便所の脇を通り、鉤の手に曲がった奥にあった。幼い頃、圭介は便所が妙に怖かったが、母が奥に移ってから平気でそこを通れるようになった。
「お前が行くと、お母さんの病気は、すこしもようならんとよ」

と、祖母に小言を言われるので、その目を盗んで、足音を秘めて便所の脇を通る。襖を細目に開けると、母はいつも背を向けて寝ていた。「圭介かい」と、母は起き上がり、髪を指で衿足にまとめて、枕もとの半纏を羽織る。茶と緑と白の縞を黒い細い線が際立たせ、黒い衿がついていたその半纏の柄は、いまも目に残っていて、それは、圭介が思い出す母の面影に、かならず付随して浮かびあがる。青い筋の浮いた透ける肌にかすかに紅を刷いたような頬と瞼は、肺結核患者特有のそれだが、圭介は母がこの上もなく美しく思われ、微熱でうるんでいる眼が特に好きだった。圭介がにッと笑うと、母の茶がかった瞳の中の小さい圭介が白い歯を見せる。母は圭介の頭を引き寄せて抱いてくれた。胸がごつごつして平べったかった。

「お前や、お兄ちゃんが哀れで、早くよくなりたいのに、どうしてこんな悪い病気なんだろうね」

父は医者なのに、母の嘆きを知らないのだろうか、母の病気も治せない下手な医者なのかと憎くなった。

「ね、藪医者って、お父さんみたいな人をいうの」

母は、こみ上げるように笑った。

「誰がそんなふうに言ってたの」

「ううん、そうじゃないけど、……でも、お母さんは、ちっともよくならないじゃないか」

見上げると、母の目はもう笑ってはいない。

「お父さんは、誰よりも立派なお医者様よ」

「でも……」と、言いかけてはっとした。その父が治せない病気なら……。恐ろしい予感が、針のように胸を貫いた。それは、圭介が七歳の冬のことで、母の記憶の中で、鮮明な部分の一つであった。

圭介は暮れ迫る農道を急いだ。町はずれから約四キロの道のりである。

この道を逆に、町に向かって母が去って行った夏の朝を、圭介はいちばんはっきりと憶えている。お

そらく、生涯忘れられぬ思い出に違いなかった。やはり七歳の夏の盛りであった。

その前夜、兄の勝介と二人は、父に呼ばれて座敷へ行った。母方の祖父がいて、父はその間中、むっつりと、一言も発しなかったが、祖父は二人を納得させようと懸命に語り聞かせた。

「お母さんは、人に感染る病気だから、ことにお前たち子供の側に置いてはならんことになっとる。早うからそう言うとるとばってが、どうしてもお父さんが承知してくれん。ところが、勝介の学校の親たちから文句の出るごとなってしもうた」

勝介は息を弾ませてさえぎった。

「なら、病気が治るまで、俺が学校を休めばいいじゃないか」

兄の勝介は、三つ違いで小学校の三年生であった。

「そんな学校なんか、行かなくてもいい」

勝介は拳を固めて顫えていた。

「そんなら学校ばやめて、お前は百姓になるか」

祖父の声には容赦ない響きがあった。

「松崎のうちでゆっくり養生すれば、お母さんはきっとよくなる。それまで聞きわけて、待っとんなさい」

松崎とは母の実家の姓で、大村の町には入るが、城下の士族屋敷や商家の町並みと違って、この村とあまり変わりない田園の中にある。やはり大村藩下級士族の出で、圭介の祖母の実家でもあった。母は祖母の姪にあたっていた。父にとって祖母は三度目の母で、生母は、父の生命と引き替えに逝ったのである。松崎家は、母の兄は東京に出て、弟は別に世帯を持ち、祖父母と母の末弟だけの静かな暮らしであった。

母も承知したし、父もやっと納得して、毎日松崎に出かけて診ることにするのだからと、祖父は必死

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c